

聖書におけるレーザーディスク化

—情報革命の転換期—

松本 富士男

時代はここまで進んだか、というのが偽らざる実感である。まさか聖書がレーザーディスクにとは、思いも及ばなかった。その上、キリスト教美術の作品群をほぼ1000点も、永久的に色彩も変わらず挿入しうるとは、研究者にとって有り難いことである。まさに現代版の絵入り写本としての聖書ということになる。

聖書は旧約39巻と新約27巻から成り、人類史上古今東西1250種もの言語に翻訳され、原典はヘブライ語やギリシャ語で書かれている。日本では1969年にカトリックとプロテスタントが共同で聖書を翻訳することが決定、二十年近い年月が費やされ、1987年9月に「聖書 新共同訳」が上梓された。

かつては全聖書を手書きということは、至難の技であった。今残っている代表的写本であるシナイ写本、アレキサンドリア写本とかバチカン写本などは、4~5世紀のものであるが、ほぼ新旧約全巻残っているのは数種類のみである。その後中世において発達したのは、福音書抜粋とか詩編の抜粋とか、あるいはこのディスクにも入っている「ウィーン創世記」のような要約である。

一般信者が聖書を全巻自由に目を通せるようになったのは、グーテンベルグの印刷術の発明(15世紀)以降である。この大発明は、情報の伝達力に飛躍的な速度と広がりをもたらした。これにより宗教改革もすみやかにヨーロッパ中に伝播した。

そしてグーテンベルグの「42行聖書」から500年たって、さらに新しい文明史的事件となりうる出来事が起こった。新時代の先端メディア技術による聖書のディスク化である。

ビデオディスクは、鮮明な画質と高度な再生能力をもち、静止画、動画、文字画面といった多様な映像表現を可能にし、かつこれらを有機的に連動させる機能をもっている。今回こうしたディスクの特性に注目して、聖書の描く雄大で荘厳な世界を躍動感あるビジュアルなものとして1枚のディスクに集約させたのである。

話は遡るが、今から約十年前、電子出版という言葉が注目されだした。従来の活字出版の工程がコンピューター処理され、その情報がCD-ROMを始めとする、電子メモリーに保存できるようになったのである。

当時、三省堂が『模範六法』をCD-ROMで発売した。これは、情報社会への転換期における革命的な出来事であった。『模範六法』は約二千五百万字から成るが、CD-ROMなら容量の五分の一程度で収録でき、本では不可能な検索など多様なアクセスが可能である。

さらにこれに先駆けて三修社はCD-ROMで『最新科学技術用語辞典』や他言語のマルチ言語辞書『CD-WORD』を発売した。また、「国民的辞書」ともいえる『広辞苑』がCD-ROM化(岩波書店)された。

このような電子出版の登場にはコンピューター技術の発達が必須である。当時、富士通や

NECなど大手電気会社が手がけていたパソコンやワープロの情報のやり取りの革命的転換は、高速で情報を処理できるCPUの開発によって成功した。新たに開発されたCPUを積んで会社のLANとつなぐことで、ワープロのレベルでもオフィスなどではコンピューターと同じようなネットワークが組めるようになりワープロも第二世代に入ったと言われた。

当時のネットワークが可能なワープロやCD-ROMは、活字印刷物に比べて高価であったが、非常に大きな可能性をもっていた。

この可能性が、宗教に新たな息吹を与えることになった。人類永遠の文化遺産である「聖書」が世界に先駆けてレーザーディスク化したのである。折りしも「聖書 新共同訳」が出版された際、これをレーザーディスクという新しいメディアに収める企画があった。聖書本文だけでなく、美術作品も収録することとなり、松本がその図像監修を引き受けた。その結果、「ディスク聖書 新共同訳」（発売、インタービジョン株式会社；制作、岩波映画製作所、9800円）が完成したのである。

レーザーディスクの最大の特徴は見たい箇所を瞬時にテレビ（モニター）画面に呼び出せることである。この「ディスク聖書」の場合で説明すると、聖書本文の各ページや美術の図版などが各々「静止画」としてディスクに収録されている。「静止画」は1枚ごとの番号（フレームナンバー）と、幾つかをまとめた章の番号（チャプターナンバー）を指定することで呼び出せる。例えばブリューゲルの「バベルの塔」の絵はフレームナンバー844で、「創世記」はその冒頭がチャプターナンバー5で呼び出すことができる。

このレーザーディスクは約15000枚の静止画を収録している。これら静止画の部分は音は出ないが、末尾に映像と音声と同時に収録した部分もある。画面はシャルトル大聖堂の彫刻とステンドグラス、音声として教会音楽（皆川達夫教授の監修による）が収録してある。

しかしこれらの情報を1枚のディスクの収録する作業は大変だった。データをインプットする作業のうちコンピューターがしうるのはわずかに5%のみで残りは人間の手作業だからだ。以下に当時の作業手順とそれに伴う困難について簡単に紹介したい。

このレーザーディスクを完成させるまでの作業は大略次のようであった。第一に、収録する静止画を集める（聖書本文の他に何を収録するか決める企画段階も含む）。その後、それをディスクに収録できるような形に変換し、フレームナンバー順に映像として編集したマスターテープを作り、レーザーディスクを複製、完成品にする。

企画段階で美術の図像も収録することとなり、松本がその選定、解説を依頼された。その成果が聖書の対応個所に挿入された900枚余りの図像とそれを検索するための収録図像集リストである。

絵画の挿入では、ルネサンス時代のものはイエスやマリアなどテーマが限られているので、できるだけ聖書にそったものを入れるようにしながらも、パウロについてや、新約の書簡集などについての絵画がほとんどないので難しい。この問題は、例えば愛についての個所にはマリアの顔を、コリント人への手紙ではギリシャ人の遺跡を、全くないところにはキリスト教美術として十字架などの写真を入れることで解決した。

機械（ハード）に関わる作業期間は約6カ月、作業手順とその実際は以下の通りであった。日本聖書協会から受け取った聖書全文の入ったフロッピーは制作会社のコンピューターで読みとれるないので、それができるように編集しなければならなかった。また、レーザーディスクに収録するのは、聖書全文だけではないので、新たな項目を設け、編集して一冊の本を作成した。新たな項目は、美術集、人名、地名解説、地図、映像作品の新約聖書の世界であり、文字に関するところは、コンピューターで文字を打ちフロッピーに入れた後、映像にたちあげるという経過で、美術集、地図は元を写真に撮り、映像にたちあげた。これでそれぞれのものとのテープができたことになる。

次に必要な文字をテロップにおこし、もとの映像と合成する。これで1ページの完成品となる。

その後、本の編集として目次、小見出し一覧、引用句の原稿を作る。文字をテロップに起こし、やはり映像にたちあげ、これで何本ものテープができるがことになる。最後にスタジオでそれぞれ必要などころに挿入しながら、頭から映像編集をしてマスターテープを作成する。

レーザーディスクは、静止画にすると、片面30分で1秒に30枚、全部で54,000枚の静止画を挿入することができる。今回は、聖書全文の270万字、書き下ろしの8万字の他、2,000枚のテロップ、1,000枚の写真が、15,000枚の静止画で収録されている。時間にすれば8分である。

1コマごとに1～54,000の番号があり、美術作品、小見出し、引用句は、この番号で呼び出すので、それぞれの挿入個所を決定し、全ページの割付をしてから、対応するフレームの数字を必要などころに記す。この作業でミスや変更があると、映像に立ちあげる前の段階にもどって修正が必要になり、もちろん1個所狂うと、すべてに影響してしまうため、かなり大変であった。

これらの工程にかかった日数は、聖書全文をプリンターで印字するために1日18時間×2週間、印字された文字が正しく編集されたかをチェックするのに1日12時間×12人×3週間、聖書全文が入っているフロッピーから聖書本文を7ページずつ映像に変換する過程に2週間である。その他の工程は割愛する。

ディスクの発売は1987年12月であった。

写真に撮る美術作品を選択する作業においては、図像学的に重要な初期の作例を豊富に収録しようと意図した。ウィーン創世記（最初期の写本）やエグベルティ福音書本、「クロイスター黙示録」の挿絵などを全点収録できたことが特筆できる。こうして完成した「ディスク聖書」の誇るべき業績の一つに、キリスト教図像集がある。800点余の代表作を一堂に、しかも部屋に居ながらにして観賞できるのである。

この図像集に集めた作品は、絵画のみならずモザイク、壁画、イコン、祈祷書、タペストリーなどバラエティに富んでいる。また近年の新しい研究や発見による、今まで知られていなかった地方、シリア、アルメニア、スペインなどの作品も網羅している。

各図版は、旧約・旧約続・新約聖書の重要な章句に対応する個所に収録した。しかし各図像だけを選び出し、同時に見ても、一つの独立した芸術品と言える体裁と水準の高さを備えている。あえて図像集と銘打ったのは、ここに理由がある。

旧約の冒頭では「創世記」初期の傑作を、新約では中世の代表的な「福音書」本を中心に、最後はユニークで現代感覚に満ちた「黙示録」を選んでいる。このように図像集は、キリスト

教美術の豊穡なり実りに溢れたものになっている。

こうした成果が図像学などの研究に及ぼす効果は大きいと考える。すでに大型博物館、たとえば大阪の国立民俗学博物館、では、ディスクとコンピューターを連動させた資料の検索・管理システムが活躍している。質量とも充実した、こうした検索システム（とそれを支援するソフト的機能）が個人レベル（家庭、研究室のモニター画面等）でも可能になれば、自分の必要（好き）な図像を集めた「空想美術館」も現実のものとなるかもしれないのである。

ディスクのすごさは膨大な量の図像の収録だけではない。音楽においてもそうである。シャルトル大聖堂の遠景から始まる約18分の動画。聖堂内外の華麗で荘厳な彫刻やステンドグラスが、重厚な合唱、解説と見事に調和し、見る者に深遠な聖書の世界への扉を開いてくれるのである。

制作から約十年…今あらためてディスクの威力を思う。望む個所をボタン一つで読めるのは、研究者や教育者にとっても、どれだけ有用であるかは自明である。さらに、聖書のディスク化は、脳性麻痺症や神経症などの人々にとっても光明を与えることができた。聖書は、すでに述べたとおり、巨大な書物である。人類文明史上最大の古典である。この巨大さを印刷技術の発達は、紙面の薄さを追求することでフォローしてきた。しかし、それは手がふるえてしまう人々にとって解決にならなかった。ディスクは足の指でも簡単に自分の好きなページを見ることができる。つまり、聖書はディスク化によって一人で聖書を読むことができるようになった。これは、介護社会を目指している現代日本を宗教的に支える重要な側面である。

その一方でCD-ROMより普及が遅れている現実がある。レーザーディスクをテレビ画面に映し出すためのハードが高価であることが原因であろう。またレーザーディスク自体がCDより大きく、携帯性で劣る点が考えられる。こうした事情を埋め合わせるため、ディスク化されたものは同時にビデオ化された。

宗教は保守的であるといわれる。しかしこのディスク聖書の登場は、これまでビジュアル化された聖書の世界と聖書そのものとの出会いである。これが宗教に新しい息吹と活性化をもたらす契機となり、また文明史において情報化社会へと転換していく時代に宗教がマッチしていく、いわば象徴となることを、私も大いに期待している。技術の発展により聖書もまた進歩しつつある。

最後にもし誇る点があるとすれば、今回、世界で初めて聖書がレーザーディスク化された。しかし聖書はカトリック・プロテスタント両教会の合同で翻訳されたにもかかわらず、このレーザーディスク化はグーテンベルグの一件以来の情報社会における革命的事件であるという認識が両教会に不足していたため、爆発的な普及に至らず、当時一時的にNHKなどのニュースに出たのみで終わってしまった。このキリスト教における情報革命についての認識不足は、21世紀に持ち越されることとなる。自戒すべきである。

[附記]

- (1) 制作工程を図説化した図表は省略した。
- (2) 1998年12月に岩波映画は倒産した。教育面で評価が高く、「情報化」にも良心的なものをも乗り越えて、時代は進んでいるというのが、実感であった（1999. 2. 10）。
- (3) なおこの研究ノートは、キリスト教学会、歴史人類学会（筑波大）で、研究発表や公開講演（国立教育会館）において1988年に話したものをまとめ、整理したものである。